

史料

下直見村年代記 (三)

佐藤大庄屋の手記による

資料提供 金員 曾 官 衛 吉
(直川村下直見江内)

鏡解 年表複製 羽 柴 弘

天保三辰年 (一八三二)

佐伯藩十一代 高泰公

(つづき)

六月十八日 天気

七月二日 少雨 三日大雨

棚井田と岩尾崎二而水く及、天水端は日稻も葉をまき、見苦敷相成ゆ。七月二日又雨にて立返り

田方見事に出來

畑方皆無同様に相成居ゆ。粟は八歩通りは立直り、唐芋は場所によりはては四歩もあり、又所々寄はては皆無同様に

里芋は種子 無覚束

年神 普請 新洞組中 大工 兵助

浦木大明神 普請 大工 澄蔵

千又庵 普請 大工 道蔵

岩尾崎愛宕 普請 岩井戸組中ニ而 大工 上野村左助

去卯年(注去年) 岩井戸組中 惣神ニ申付

早魃二付兩乞

享保年中此方御領分中、兩社(注城下五所明神及)

若宮(傳社)に於いて、十二番神祭 大明神宮にはの

べり一對 若宮へは杉苗五百本 願成就ふ節直に

参詣 上下(若)にて御役人様は御鼓 無之
吉野氏 断羊寄 在浦役人参詣

九月十一日 風雨

先年、開依へ無之水 沖、原土手切レ、棚井田土手切レ、叔崎土井切レ、御木川除大破損

岩井戸井手残らず落、高平井手残らず落つ

棚井田馬屋小屋五軒流失

千又 吾家二軒改つゞし、馬屋小屋六軒改つゞし

水車 大庄屋喜四郎二軒流

水高凡 前川走丈七尺余

天保四巳年 (一八三三)

の件千代助 昨年、習い、正月六日、三依迄始りて参而、基師範肥後熊本植木 山本善次郎と申す仁

初段なり 二月七日三佐公帰る

三月 殿様へ御伝奏御馳走仰せ付られ

五月十九日 殿様御下り 御上御着城なり

六月五日 殿様 初御目見 同日御料理御付られ

同 十三日 殿様 番五へ御川狩御出 上岡大庄屋方へ御立寄せらる

六月十八日 要蔵 表向代勤仰付られ

九月二日 塩谷大四郎殿 小林藤之助殿 其外御勘定始

上下参格人、新開場所御見分として御起 堅田村

江へ御逗留 尤も白粉へ入込され

同日 相江御出立 小林藤之助殿始り御人数半下

中、谷通り 塩谷大四郎殿始り半下は五ヶ村邊

切畑林登 横川村泊 要蔵 切畑村大庄屋代り二御

付ら水罷り出

御見送り 御郡代山崎喜左衛門殿 御代官室脇治吉

衛門殿 御領御代官松岡半左衛門殿 御徒士目付茂

田佐左衛門殿 其外役々数多奉り也
九月廿二日 殿様 当方へ御川狩として御出御座也
朝四つ時(注午前十時)頃御出立 夕七つ半(午後五時)頃
御帰り遊ばされ也

御婦りに切畑村に御立寄 御出御人数御上下百三十
人程に御座也 五ヶ村大庄屋、下野村、古市、上岡
上野村、中野村、切畑村、石村々大庄屋参り詰め也
十月十日 殿様 下野村へ御入
同 十三日 殿様 上野村へ御入
同 十七日 同 蒲江浦へ御出 同十九日 御帰り
十一月廿九日 御用に付罷出

御上御差支二付 殿様御沙汰御座也二付 御領分中
にて式年石割賦に成 当村五拾石当り、右之内廿石
自身出す 拾五石宛 喜四郎、弥四郎二申付也 延右
兩人三拾五石宛七拾石出す 外は惣百姓八拾四石宛
斗出す。自身八別に杉走山上へ 御請相濟

天保五年(一八三四)
正月廿九日 献納之儀二付御用
自身 御惟子地一反 御料理 百姓株走軒
紺屋株走軒 御付ら札也

喜四郎二金売西 外二百姓株一軒
同人伴佐四郎に金三百足
弥四郎二金売西二 刀御免
同人伴半四郎へ金三百足 下置か札也

其外 百姓銘々三御樽 肴 下置か札也
昨年作方悪敷二付 米直段 高直 銀七貫七、八百目徒り
い左し也 八月に至り也へ米九百目徒りに成る
正月分四月迄 糶崎一、口分八拾割余土井新親二仕立
也 古公有之候也、一昨年洪水二切申也

乙津 後藤弥四郎方へ銀頼母子有之 浪矢作左工門自身
引合二而一口加入い左し居也 四月十六日会座の
節 要蔵電取二参り 当り電に成 銀五拾貫目取申
也

当年御領分中へ出銀致し 御切手不通行二付 今度へ
御領会所立也 右掛りに浦大庄屋内へ願立也者十式
人 町方拾式人都合式拾四人之処、一日四人死相詰
両替致正銀 二定る 右出入共式反歩あり、手代
四人懐方走人 人足走人 判屋式人

天保 六未 年 (一八三五)
赤木村大庄屋安藤九郎 瘧死二付同人養子
庄屋御付らる
古二付佐藤甚兵衛へ後見御付ら札也 同人伴佐藤要蔵へ
苗字 刀御免、大庄屋并御付ら札也 九月三日なり
当年三月十一日大庄屋伴子代助 間七郎右工門様へ御供
二而江戸へ甚修業に参り也 同所墓打安井仙知門弟
当十一月 真黒毛駒走足
殿様へ献上 御褒美として銀式枚下置か札也
三二成る。

天保 七申 年 (一八三六)
二月十六日 御用二付御呼出し 大庄屋佐藤甚兵衛御手
くはとして、居村において酒造御付ら札也
同日新洞庄屋武藤隠居居頭左屋又七二御付ら札也
四月十八日 酒蔵建也
九月分酒造始る 十一月四日分売始る
秋作悪ク 米直段走メ五百五十石に御蔵相場立ち、酒蔵
米日州分調也 老貫三百石につく。
(おわり)